

研究総論

1 研究主題について

研究主題 学び続ける子どもの育成

私たちは、幼小中一貫したすべての教育活動を通して、豊かな「社会生活」を創造する資質や能力を育成したいと考えている。将来、家庭・職場・地域・社会における問題や状況に対して、他者との合意形成を図りながらよりよい方法を見付け出し、協働的に自律的に行動できる力を、子どもたちに身に付けてほしい。そうした願いのもと、11年間の附属学校園での学びを通して、他者とともに自らの課題を追求・解決する過程にある学ぶことの真の楽しさにふれること、生涯にわたって学び続け、豊かな社会生活の創造に寄与する人間に成長していくことを願い、私たちは一貫した教育活動を行っている。

以上のような願いを基盤とし、平成25年度までは「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」を主題とし、確かな学力の育成を目指して思考力・判断力・表現力の育成を目指した。この研究においては、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするかかわり合いを学び合いと定義し、学び合いを通じた思考力・判断力・表現力の育成のためのよりよい保育や授業の構想や教師のはたらきかけについて研究を深めた。子どもを的確にとらえ、教師の明確なねらいに基づいた協働的な学び合いの場を設定することによって、「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」に迫ることができた。前次研究の最終段階では、子どもがこれまでの学びを自らいかし、新たな学びをつくりあげていくような「学びを拓く子どもの姿」を求めた。これはすなわち、学んだことをいかすことに焦点を当てて思考力・判断力・表現力を育成していこうとする試みである。

今次研究の研究主題を設定するに当たっては、上述のような研究の成果をさらに発展させていくために、改めて私たちの子ども観を見つめ直した。それは、子どもは本来「もっと深く知りたい」、「もっとやってみたい」と、自ら高みを目指して追求する存在であるということである。自ら願いをもった子どもは、意欲をもって自らの課題解決に向かって追求していく。こうした学び続け、自らの力を主体的に伸ばしていくような姿を求めていきたいと私たちは日々願っている。実際に本校園における子どもたちの姿として、課題に真摯に取り組み、自分の力を進んで伸ばしていこうとする子どもたちのよさがある。これは、さらに伸ばすことを大切にしたい。以上のような立場から、育てたい子どもの姿について協議を重ね、浮かび上がったのが、「子どもが自ら問いをもち、粘り強く何度も練り直しながら追求し続けていく姿」である。以上のことから、今次研究の研究主題を「学び続ける子どもの育成」とした。

ここで、「学び」とは学校での授業における学習のみではなく、日常の暮らしの中に多様に存在するものも指す。子どもたちの身の回りにあるあらゆる対象から今までより新しい見方や考え方を得ることを「学び」ととらえたい。そうした学びが主体的に進んでいくこと、すなわち自分の意志によって連続していき、自らを高め続けることを、「学び続ける」ととらえているのである。

以上の立場から、平成26年度は研究を推進した。推進するにあたり、どのような子どもたちの姿を目指し、そのためにどんな手立てを講じていけばよいか考え、実践し成果と課題を得て今年度を迎えた。その具体についてこれから述べていきたい。

2 「学び続ける子ども」とは

(1) 目指す子どもの姿

私たちは幼稚園から中学校の各段階において、保育や授業によって子どもたちの力を伸ばしていくにあたり、目指す子どもの姿を次のようにした。

目指す子どもの姿 問いをもち、主体的に追求する姿

子どもの中にすでに慣れ親しんでいる体験があり、その体験とは異なる新しいものが入ってきたとき、その違いを何とか埋め合わそうと均衡を保とうとする。この刺激が動機となり、子どもの中で、学びたいという欲求へとつながっていくであろう。子どもたちにこうした学びへの動機があり、そこに驚きや信念があれば、自分が納得いくまで問い続けるであろう。こうした子どもの中に解決したい問いがあれば、解決へ向けて様々な方法を試したり友だちと協力したりして追求していく姿が表れると考える。すなわち、子どもの中に自らの意志で学びを続けたいという意欲があるということは、解決したい問いが具体的な形で子どもの中にあることであると私たちは考えた。

こうした姿を目指し、平成26年度より本主題のもとでの研究を始めた。平成26年度は目指す姿を「一人一人が問いをもち、追求する姿」として主題に迫る研究を推進した。一人一人が問いをもち、追求する姿が表れるような保育・授業を展開していくことにより、教師主導でなく子どもたちが自ら主体的に問いを解決しようとする姿がみえてきた。そして、問いをもち、追求するためには、①自分の取組を客観視することが適切にできることの重要性、②的確に子どもたちを揺さぶることで解決すべき問いが浮き彫りになること、③子どもたちのもつ問いの種類は複数あること、④学んだことを生かそうとする力が重要であることの四つが見えてきた。こうした問いをもち追求する姿について議論する中で、保育や各教科の影響も無視できないことが見え、例えば③の問いの種類について代表的なもので言えば「どのようにしたらよいのか？ (How)」という問いと「なぜ？ (Why)」という問いがあり、前者は音楽や体育・保健体育科で、後者は社会や算数・数学科で特にクローズアップされた問いの種類である。また、保育や生活科といった幼稚園～小学校低学年段階の子どもたちにとっては一人一人が問いをもつ前段階として、一人一人が願いをもつことの重要性も見えてきた。

一方で、大きく言えば二つの課題が見えた。一点目としては、一人一人が問いをもつ、ということとは学習集団の中で一人一人がもつ問いの質や方向性をどの程度求めていけばよいのかということである。学習集団の中の誰もが問いをもって追求する姿を求めたのであるが、「一人一人」とすることは程度の差や方向性の違いをどのように考えていけばよいのか、という課題でもある。二点目は、「問いをもつ」ということについて、保育や教科、領域によって様々なとらえ方がある、さらに踏み込んでいえばそれぞれの特質上様々なとらえの違いが起きざるを得ない、ということである。算数・数学科や理科では、「問い」とは何かということに基づき、問いをもつ姿を定めた。国語科や音楽科では、内容が大きく領域ごとに分かれており、それらに共通する「問いをもつ姿」を策定した。以上のような「問いをもつ」ということについても、課題が見えてきたのである。

そうした成果や課題を踏まえ、今年度は「問いをもち、主体的に追求する姿」を目指す姿とした。まず、「問いをもつ」ということは一人一人がもつこともあれば、学級集団全体でもつ場合もある。昨年度の課題も踏まえ、「問いをもつ」ことそのものを大切にしていきたい。また、そうした「問いをもつ」姿を目指した授業の中で主体的に追求する子どもの姿が見られた成果から、より主体的に子どもたちが学んでいく授業の在り方とはどのようなものであるかを検証すべく、「主体

的に」追求する姿を目指すこととした。

以上のように、「学び続ける子ども」の育成をしていくことを目的とし、保育や授業を構想していく中で、問いをもち、主体的に追求する姿が表れることを手段として、今年度の研究を推進していきたい。

(2)「問い」とは

ここまで述べてきた「問い」とは、主体的な追求の高まりへとつながる疑問、解決したいという願い、解決のための方法を考えることなどにとらえている。個でもつ場合もあれば、集団でもつ場合も考えられ、以下のような条件や性質をもったものであると考える。

◎ 子どもたちが切実な解決を願うもの

- ・対象との出会い、教師からの投げかけ、子どもの学習経験など様々な要因によって子どもたちは問いをもつであろうが、いずれも子どもにとって切実に解決を願うものでありたい。

○ 学問のおもしろさにふれることができるもの

- ・私たちは保育や各教科等の日々の学習において、目標とする力をいかにしてつけていくか、そうした力を自分のものにするための学び方をいかにして獲得させていくか、工夫を重ねているところである。こうした力が自分についていることを自覚し、子どもたちは学問のおもしろさを実感し、追求を深める原動力となるであろう。今までよりも新しい見方や考え方を得て「学び」を実感していくことを引き起こしていくことへとつながっていくことが期待できる。

○ 単元を貫くものと質的变化するもの

- ・単元の初期段階でもち、単元を通してもつものもあれば、学習が進んで個の深い追求や他者と学び合って異なる考えに出会うなどして、対象に対する認識の変化が生まれて変化する問いもあるであろう。こうした問いは全く新しいものではなく、最初の問いが変化したり派生したりして新たに生まれたりしてできるものとする。そのようなことを「質的变化」と考える。

○ 発達段階によって変化するもの

- ・幼稚園から中学校まで幅広い発達段階の子どもたちが、同じような仕組みで問いをもつとは考えにくい。例えば幼稚園児であるなら遊びに没頭する中で見出すものもあるだろう。また、問いをもつ、ということそのものを求めるのではなく、問いをもつ素地を養う段階ではないか、ということがこれまでの研究を推進していく中で見えてきている。中学生なら学習の対象に出会い、個の中でじっくりと考えていく中で静かに追求しながら見出す問いもあるであろう。その質も、それぞれの段階でつけた力によって異なってくると考える。

これらの問いは、子どもが自ら「解決したい」と思えるものであれば、主体的に解決しようと追求していくであろう。そうした「問い」をもち、主体的に追求する姿こそ、私たちが求める姿である。こうした姿が現れるためにも、◎で示したように、子どもたちが切実な解決を願う「問い」がもてるような保育・授業展開を求めたい。

以上のように、保育や授業を通して子どもたちが主体的に自らの「問い」をもち、追求する姿が生まれるような学びをつくっていきたい。

(3)「問いをもち、主体的に追求する姿」の具体

私たちはここまで述べてきたような「問い」をもち、追求する具体的な子どもの姿を、以下のように考えた。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------|
| ○ 願いをもっている | ○ 疑問や調べたいことをもっている |
| ○ 見通しをもっている | ○ 粘り強く何度も練り直している |
| ○ 試行錯誤している | ○ 立ち止まって考えている |
| ○ 友だちの考えを取り入れ、自分の考えをよりよいものにしようとしている | |

私たちは授業を構想し、実際の授業の中においては、子どもたちの見方の広がり、思考の深まりなどを意図してはたらきかけていく。どういう姿が出てほしいと願うのか、教科や単元によって異なるであろう。また、発達段階によってもその姿は異なってくる。さらに、子どもたちの営みが続いていくことを願って授業を構想した際、重要になってくるのは、問いが連鎖するようにつながっていくことである。(2)において問いの質的变化、ということ述べた。対象への認識の変化で問いも変化を見せることであるが、このように子どもたちの切実に解決したいという願いのもと、学習の進展によって一つ生まれた問いが発展しながら新たな問いへと連鎖するような姿を求めていきたい、ということである。

小学4年生の理科で天気と気温の変化を学習した際には、プールの経験を想起することで生まれた気温と水温の変わり方についての疑問が、気温と天気の関係を自分の目で確かめていくことによって「雨の日はどうなのか」「晴れや曇りの日のことをもっとよくみないといけない」という意識へとつながり、二つの関係を追求していこうとする姿となって現れた。こうした姿こそ、子どもが問いをもって主体的に追求しようとする姿ととらえる。そして、問いが学習の段階を追って質的に変化していることもとらえられる。

以下に、このような姿が出るため、授業の中で私たちがどのようなことをしていけばよいと考えているのか、その具体策について述べていく。

3 問いをもち、主体的に追求する姿が現れるために

(1) 追求する姿の現れる学習構造

前項に挙げたような子どもの姿は、ただ学習する対象に子どもたちを出会わせることによって現れてくるものではない。対象との出会いから学習を終えて自分の取組を振り返るまでの様々な場面でこうした姿が現れるよう、意図した展開をしていかねばならない。

そこで、私たちは以下のような授業を構成する要素を柔軟に組み立てていきながら、子どもたちが問いをもち、追求していく姿を見られるような授業をつくっていきたい。

① 学ぶ対象に出会う

子どもたちは日ごろから何か気になるものや興味を引かれる友だちの発言などに出会うと、彼らのもつ好奇心からそれらの対象に対して「もっと知りたいなあ」「なぜだろう」といった関心が湧く。このような対象が、私たちが授業を構想する際に子どもたちにつけたい力をさらに高めていくようなものであり、なおかつ出会うことで感じた興味や疑問が、切実に解決したくなる問いとなるようなものが望ましい。そうした、適度な困難さをとらない、解決の喜びを子どもが感じられるような対象を私たちは吟味していきたい。

しかし、それは単に学んでいく対象としてのよさをもつだけではよいというものではない。どのように出会わせていくのか、出会ったことが次にどうつながっていくのか、といった、出会いからその次への構想や、実際に子どもたちを前にしてはたらきかける時のあり方を熟慮していくことで、子どもにとって実りのある学びとなるであろう。また、何をどう出会わせるか、ということは一人一人の子どものことをしっかりととらえ、その子どもたちに応じた出会わせ方の工夫をしてい

くことが求められる。

以上の点を大切にしていこうことによって、子どもにとって必要感のある学びとなり、追求への意欲はより高まるであろう。

② 自身の問いをもち、考えを深めていく

対象に出会い、もっと考えてみたいという意欲をもった子どもたちは、おぼろげに何とかしてみたいという気持ちから、自らの問いをこういうふうと考えて解決していけばよいのではないかと、という見通しをもつてであろう。それが解決への意欲を高めていくと考える。自身の興味や疑問が問いという形にまで高められるように、疑問をもったことについて子どもなりに解決したいという思いに基づいた活動をまかせてみたり、子どもが考えていることを整理してみたりするような活動が考えられる。つまり、自身のもった「問い」について自分なりに熟考する場をもつということである。

こうして、何となく感じていた疑問が、「問い」として子どもたちの中に成立する状態を目指したい。学習の初期段階であるならば、いかに問いをもてるか、ということを目指す姿となる。また、問いが質的な変化をしていくような段階であれば、自身の中の問いを何度も練り直し、これを自分をもっと追求したい、という思いを高めていくことが目指す姿となる。

つまり、一人一人が問いをもち、それによって自身の考えがより深まっていくような学習の展開を大切に考えていきたい。

③ 互いに高め合う

自身の中に問いが生まれ、解決への道筋が見えてきた子どもたちにとって、他者の取組を知ることは、新しい見方や考え方が加わったり、自分のもっていた考えが揺さぶられたりするなど、学びが深まっていくであろう。例えば音楽の授業である楽曲に出会ってこのように歌いたいと考えたとき、仲間の歌う姿にふれたり、自分が歌ったことに対してそれを仲間がどう考えているかを知ったりする機会を得るとする。このことは、自分の歌い方を見つめ直す機会となり、自らの歌い方に足りないことは何だろうか、友だちのように歌うには、〇〇という点をもっと伸ばしていきたい、といった考えの変容が見られるであろう。仲間の姿から自分がよいと思える点を取り入れたり、仲間の考えに揺さぶられたりすることは、個々の追求により深みが増していくことが期待できる。

私たちはこれまでも、子どもたちが個々に考え出したことを、他者の考えに出会わせることによって、自分の取組を立ち止まって考え、個々の考えを高めていく段階を意図的計画的に取り入れてきた。こうした協働的な営みを「学び合い」として位置づけ、学習の中で欠かせない過程として取り組んできた。学習の過程の中でこうして子どもたちが他者の考えを取り入れることで、自らに問いかけ、また新たな問いが生まれることによって、学習に広がりや深まりをもたせ、主体的に追求する姿を目指していきたい。

④ 自分の取組を振り返る

子どもたちが上記のような段階を経ながら自身の問いの解決に向けていったとき、自分の取組のよさといった学び方としての価値、獲得した学習内容としての価値など、自らの学びの価値を感じるであろう。その感じ方は、ほぼ無自覚な子どももいれば、取組のたびに自覚していく子どももいると考える。私たちは、自らの学びの価値を実感し、それを自分のものとして取り入れ、次の学びにいかす子どもの姿をこれまでの研究から見出してきた。この場面があることで学んだことへの有用感を感じるとともに、新たな問いが生まれ、追求が続き、より学びが深まっていくであろう。自ら問いをもち、追求する子どもを育てていくには、自らの学びの価値を実感するこのような場面が必要なのである。

こうした振り返る場面というのは、1単位時間の中の短い期間でのふりかえり、単元終了時の長

い期間でのふりかえりがある。短い期間でのふりかえりの集積があることで、長いスパンのふりかえりがより深いものになるであろう。こうした経験を発達に応じて意図的計画的に積み重ねていくことで、より深みのある追求をしていく子どもが育っていくであろう。

(2) 授業内における教師の役割

問いをもち追求する姿を目指すためには、子どもが問いをもとうとしているとき、もった問いをさらに深めていこうとするときなど、必要に応じて教師が子どもの考えの背景を探りながら整理したり、方向付けたりするなど直接的にはたらきかける営みが授業の中で大切になる。このはたらきかけが子どもにとってプラスに働くことで、子どもが自分の問いを自覚し、解決したいという思いが高まるであろう。

こうして子どもにとってプラスになったり、自らの問いをもって解決していくよさを見出したりするために、まず私たちがすべきことは子どもをとらえることである。「この子どもならここでつまづくであろう。だから、この時にこういうはたらきかけをすることで、さらにこの子どものよさが伸びていくであろう」という判断につながることで、こうした的確な子どもにとらえに基づいて、取組を価値付けたり、迷っている子どもへ道筋を方向づけしたりすることなどが考えられる。教師は、目指す姿が表出するような授業内の役割の在り方について考えていきたい。

4 今年度の研究の視点

私たちが目指す姿を実現していくための学習の対象や授業の構造はここまで述べてきた通りである。そうした姿を実現するための研究を推進するに当たり、以下のような視点がみえてくる。

- ① 子どもたちの主体的な追求につながるような問いを生み出す対象とはどのようなものなのか。【学びの対象】
- ② 子どもたちの問いの道筋を教師は予測し、次第に広がったり深まったりする構想とはどのようなものか。【授業の構想】
- ③ 子どもたちが主体的に追求していけるよう、教師は授業の中で何をするとよいのか。【はたらきかけ】

以上のような三つの視点に基づいて研究を推進していくのであるが、より具体的にかつ成果の見える検証にするために、この視点の中から以下のように焦点を絞ることとした。

問いをもち、主体的に追求する姿が現れるためには、
どのような対象とどのように出会わせればよいか。

どういう対象に出会わせるか、というのは3(1)①で述べたように、単に教材を選ぶということは違い、目の前の子どもたちに何に出会わせてどのような力をつけていきたいか、という私たちの子ども観や教材のとらえにもつながることである。そのためには、何に、どのように出会わせるのか、ここで言う「何」とは、子どもにとって直接学習に向かうための教材であることはもちろんだが、出会うことで自らの考えが深まるような「考え方」も含めて考えたい。

また、出会いというのは単元の最初だけを指すものでもない。前述の3(1)①～④に述べたような授業の構成要素に基づいて考えた時、自身の中に湧いた問いが質的な変化をする際には、教師が用意したものや友だちの考えに出会うことこそが大きな要因になるであろう。こうした出会いが互いの高め合いにもつながるであろう。

以上のように、学習の中に様々な出会いがあり、それを意図的に教師が設定していくための授業の在り方を検証する、ということである。今年度は子どもたちが問いをもち、主体的に追求する姿を目指すためにも、何にどのように出会わせていくか、ということを経験の方向性として定め、保育・授業実践を通して検証していきたい。

5 おわりに

前次研究を受け、昨年度から「学び続ける子どもの育成」を主題とする研究がスタートしている。しかし、何も全く新しいことを私たちは目指しているわけではない。子どもが追求する姿を求めることは、私たちは常に意識し続けたことである。そこに「問い」をもつという視点をもつことにより、追求する姿を目指すのが今次研究の特色といえるであろう。この営みそのものが「学び続ける子ども」の育成であると考え、どのような「問い」をもつ姿が具現化していくことが望ましいのか、そのために私たちができることはどんなことなのか、ということについて、出会う、ということを経験のキーワードの今年度の研究を推進しているところである。

学び続ける子どもを育てることは、生涯にわたって学び続け、自らの人生をより豊かなものにしていくことへとつなげていくことができるであろう。4歳から15歳までの成長過程で大きな変化をみることのできるまさにその時に、私たちがそうした方向性での学習を一貫して行うことは、一人一人の人生をより豊かなものにしていく基盤を育てていくための営みである。そう考えると私たち教師も学び続けている存在そのものであり、子どもたちとともによりよい学びをつくりあげていくことを何よりも大切にしていきたい。

ここまで述べてきたことに基づいた、保育や各教科等における具体的な取組については、それぞれの保育・教科構想や実践例へと委ねたい。 (文責 喜多川 昭博)

【参考文献等】

- アルベルト・オリヴェリオ『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』創元社，2005
- 中谷素之『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり 動機づけの教育心理学』金子書房，2007